

## ご挨拶

Thammasat University  
日本語教育国際シンポジウム実行委員長  
Associate Professor Warintorn Wuwongse

2006年6月23日及び24日の2日間、バンドン市パジャジャラン大学におきまして東南アジア日本語サミットが開催されました。私はタイの代表としてサミットに参加させていただきました。サミット閉会の直前に会場で次の日本語教育国際会議はどこでしましょうかとの質問が出て、それに対してタイではいかがでしょうかとお誘いの声が上がりました。それから2年、今回タイ国におけるこれまでで最大の日本語教育国際シンポジウムを開催できますことは非常に喜ばしく、また誇らしいことです。本シンポジウムでは特別招聘者数7名（内訳：日本、マレーシア、インドネシア、フィリピン、ラオス、ガンボジア、ベトナムより）、発表者数33名、参加者含め、総数約300名となっております。

本会議の実施に大いなる支援を頂きました国際交流基金、財団法人東芝国際交流財団、タイ国高等教育委員会、ならびに国際交流基金バンコク日本文化センターに対して感謝の意を表したいと思います。お越し頂きました在タイ日本大使、特別招聘者の皆様、そして発表者の皆様ありがとうございます。また、このたび、ご尽力をいただきました実行委員、関係者の皆様にも、この場をお借りして御礼を申し上げたいと存じます。ありがとうございます。

## シンポジウム開催に寄せて

国際交流基金東南アジア総局長  
バンコク日本文化センター所長 吉川 竹二

「東南アジアにおける日本語教育の展望」と題して本シンポジウムが2日間にわたり、タイ全国の参加者、東南アジア諸国そして日本からも多くの発表者が参加して開催の運びとなりました。その実現をともによこぶとともに、開催に尽力された関係者、すべての支援者の方々に私からもこころより感謝申し上げます。

東南アジアでは40万人を超える日本語学習者がいま、6千人の教師のもとで日本語を学んでいます。その大半は10代、20代の若者で、7-8万人が大学生、30万人近くが高校生以下です。ノンネイティブの教師の皆さんは、多くの課題に取り組みつつ困難をのりこえながら外国語である日本語を教えておられることと存じます。また、日本人の先生方の多くは、異文化の環境下で種々の制約に苦労しながら工夫をこらして教鞭をとっておられることと存じます。次代を担う若者が皆さんに助けられて「日本語」という新たな世界への扉をひらくカギを手にしてくれる意義は、まことに大きいと思います。

国際交流基金(The Japan Foundation)は、1972年の設立以降一貫して教師支援とともに教材・情報・学習者の支援の観点から、海外の日本語教育普及事業を行ってきました。最近では、毎年12月に実施する日本語能力試験の内容改訂と年2回実施化や日本語教育スタンダード(仮称)の提示などこれらの実現に向けて準備を進めています。また、全世界の日本語教育機関を結んで連携強化をはかる「さくらネットワーク」もスタートしたところです。これからも、海外の教育現場の状況をよりよくするための支援、そしてその意義をアピールしていく必要性和責任の重さを実感しています。

今回のような大規模で地域的な研究発表の機会は、参加者の情報と知識の交換にとどまらず、所属機関をこえ都市をこえ国境をこえた教師間ネットワークを促進するうえで大きな役割をはたすものと確信します。デジタル化した社会、インターネットが発展した現代にあっても、会場に足を運んで一堂に会し、意見と笑顔をかわすことから得られる情報量にまさるものはないからです。

最後に、このような機会をもうけるため、ながい時間を費やして準備に力を尽くされたワリントン・ウウォン准教授をはじめ主催者タマサート大学に深甚の敬意を表したいと思えます。そして、バンドンからバンコクへとつなげられたこの対話と交流の機会がさらに次にひきつがれることを祈りつつ、私の挨拶とさせていただきます。

# 日本語教育国際シンポジウム

## 「東南アジアにおける日本語教育の展望」の開催にあたって

財団法人 東芝国際交流財団  
専務理事 名女川 文比古

世界で日本語を学習する人口は年々増加しております。国際交流基金の調査によりますと 2006 年現在、133 カ国で約 298 万人が日本語を学習しており、これは前回調査の 2003 年と比較し 60 万人余りの増加となっております。地域別でみると東アジアが全体の約 60% を占め、東南アジアはこれに次ぎ 15%、44 万人となっております。

日本語を学習する目的は、国や初等、中等、高等、及び大学といった教育段階によって異なりますが、従来は日本との経済的な繋がりが深化する中、就職や事業などの実利的なものから日本文学、芸術、産業などの学術的興味が主流でした。しかしながら、近年では日本のアニメ、マンガから音楽、コンピュータゲーム等、若者の新たな関心の広がりが日本語を学ぶ動機の一つになっているようです。いうまでもなく語学はそれ自身が目的になることもあります。多くはそれぞれの人達がそれぞれの目的を達成するための手段として学ぶ事の方が多いのではないのでしょうか。一方、母国語以外の言葉を外国語として教育する場合、学生にとっては何かを達成するための手段であるにせよ、語学教育としては、言語のみならず社会や文化にかかわる背景を教育者がしっかりと理解していることが求められます。まさに言語学と異文化コミュニケーションの双方が不可欠なものとなります。

今回の日本語国際シンポジウムは、2006 年にインドネシアで開催された「東南アジア日本語サミット」に引き続くものと伺っております。ASEAN 諸国をはじめとする東南アジア各国はそれぞれが独自の文化、伝統と歴史を有し多様な社会を形成しております。よって、日本語という言語を外国語として学ぶ場合、各国それぞれの教育機関が抱える課題や問題点は一様なものではないと思います。しかしながら、各国の関係者が研究交流を通し、それぞれが抱える問題点を整理するとともに、研究者間のネットワークを常態化することより日本語教育のレベル向上が効率的に図れるものと確信いたします。

私ども東芝国際交流財団は、国際交流をすすめ対日理解の促進を図るとともに国際社会・現地社会に広く貢献することを目的としております。今回のシンポジウムの開催は私どもの財団の主旨に叶い、また時宜を得た企画であると思います。シンポジウムの開催を企画されたタマサート大学及び関係者の皆様のご努力に深く感謝と敬意を表します。